

Q.0 ニーチェのいう哲学者たちが人間的でありすぎると哲学に対する畏敬の情が破壊されるというのはどうしてですか。認識論は哲学に対する畏敬の情がないのですか。

5 A.0 ニーチェがそう言っているのです。ニーチェを読んで考えてみてください。表面的には、人間以外のテーマを考察することが欠けている（宇宙とか、自然とか）から、人間の認識のことばかり論じている、という批判のようにも思えます。このことが、ニーチェからすると、哲学が考察すべき対象の一部分しか考察していないから、哲学をばかにしている（畏敬の情がない）、ということになるのかもしれませんが。

10 Q.1 博識であることは、哲学をする上で複雑に「考えること」の手助けになるとおもうんですけどね。

A.1 その通りだと思います。Q.3とも関係がありますが、実際の人間の場合は、「考えること」は、何らかの知識なしには出来ないと思います。

15 Q.2 哲学が認識論程度に後退させられていく様子を研究するのも面白いかなと思いました。

A.2 面白いかもしれません。ハーバーマスの『認識と関心』が参考になるかもしれません。

20 Q.3 知と博識に関して、多くの事を知っているのを博識というのかもしれないが、「知」と「智」の違いがあるのではないか。

25 A.3 ヘラクレイトスのいう polumathie (ポリュマティエー) を「博識」（多くのことを知っていること）と訳しています。これに対して、「本当の意味の知（知識）」と言っているのは、noon echein (ノオン エケイン) 「ノオス（知性）をもつこと」を意識したものです。おたずねの漢字そのものの字義としては、「知」は「さとり・わかる」と「覚える・記憶する」と意味が広く（以下の1.と2.の両方に使われる）、「智」は「さとり・賢い」という意味で使われるようです。整理すると、暫定的ですが、以下ようになります。他にも、「知」に関係する用語や概念がいくつもあり、哲学者によって、意味合いが違っていたりするので、その都度、考えてみましょう。

30 1. 「智」 「本当の意味の知（知識）」 「理解力」 「さとり」 ソピアー

2. 「博識」 「（ふつうの）知識」 「多くのことを知っていること」 「覚えて記憶していること」 ポリュマティエー

35

40

45

50 Q.0 ピタゴラス派(ママ)の数は質料という考え方がちょっとよくわかりません。数は目に見えないのに。 . . .

Q.1 ピタゴラス派(ママ)が何故「数」を質料としたのかが気になりました。どうして形相としなかったのでしょうか。形相が万物の根拠となることはできないのでしょうか。

55 A.0 & 1 ピタゴラス派をはなれて、形相が万物の根拠である、という考え方は可能でしょう。しかし、アリストテレスの見るところでは、ピタゴラス派が言う「数」は、形相ではなくて、質料なのです。アリストテレスによれば、ピタゴラス派の人々は、火や土や水のうちにおいてよりは、数のうちにおいてこそ、存在するもの・生成するものを見て取ったのです。数をもつこれこれの特性(4か9)は「正義」であり、これこれの特性(1か2)は「魂」と「知性」であり、ほかのそれ(7)は「好機」である、というように。そして、アリストテレスは、結論として、ピタゴラス派の「数」が質料に分類されることを次のように述べています。(『形而上学』第1巻第5章を読んで下さい。)

65 　しかし、思うに、彼らのたてた構成原理は、質料(素材)としての原因に配属されることになるであろう。というのは、彼らの主張によれば、ものの実体はそれらから、それらを内在的な要素として構成され形づくられる、というのであるから。

[Arist. *Metaph.* A5, 986b6-8, 藤澤令夫訳]

Q.2 アリストテレスの学問の領域区分によると倫理学は対象が他の仕方でもあるプラクティケーなので、絶対的な善のようなものはないとアリストテレスは考えたということですか。

70 A.2 その通りです。「他の仕方ではありえない事柄」と「他の仕方でもありえる事柄」は、「類において異なる」(EN, VI, 1139a9)と言われて区別されます。そして、この点が、ソクラテスやプラトンと、アリストテレスが異なる点です。

Q.3 アリストテレスの四原因説は、後の哲学者の考えの中にも登場するようなものなのでしょうか。

75 A.3 肯定的に使われる場合も、批判的に使われる場合も、普通に、常識として登場します。但し、ギリシア語やラテン語の表記ではなく、各国語に訳されて使われることも多いので、注意が必要です。例えば、「目的因」は、ラテン語では, *causa finalis* ですが、英訳されると, *final cause*なので、これを「最終の原因」などと訳したりするのは、哲学史の知識(アリストテレスの四原因)がないからです。

80 Q.4 「タレースは、水をそれであると主張している」水(血液、命)としても、事物の要素、原理との関連はどういうことなのか。

85 A.4 「事物の要素、原理」をアリストテレスは、アルケー(*arche*, 始原、始元)と言っており、タレースは、そのアルケーを「水」としている、というのです。「事物」が「もの」でなくて「こと」の場合は、その「こと」の構成要素を「もの」にまで還元して説明しなければならないでしょうが、「もの」については、究極の構成要素は「水」である、というのがタレースの主張である、ということになります。この立場によれば、現在、かたくて乾いているように見えるものであっても、もともとは「水」からなっている、という解釈です。そして、大地はそもそも水の上に浮いている、とタレースは考えていた、とアリストテレスは付け加えています。そういう究極の「もともとのもの」としてのアルケーを、タレースの次に、アナクシマンドロスは「無限のもの(アペイロン)」、アナクシメネスは「空気(アエール)」とした、とされています。

- 95 Q.0 「後期には、少なくとも個人の自覚、靈性が深くなった」という部分の意味がいまいちわかりませんでした。
- A.0 後期のプロティノス（『エンネアデス』）、プロクロス（『神学綱要』）らの著作を読んだことがあれば、よくわかることです。polis（都市国家）と個人にとっての「よくあること・生きること」が一致していた時期から、imperium（帝国）と個人の「よくあること・生きること」が一致しなくなったことにより、個人は、大規模なimperium（帝国）のことを論じても空しいだけなので、個人的な心・魂の内面を問題にするようになった、ということです。
- 100 Q.1 アリストテレスの哲学史が、アリストテレス自身の色眼鏡を通して見られたものだという可能性を見つめた（ママ、？）ようとしたのがJaegerらによるアリストテレス批判の再検討の動機ということでしょうか？
- A.1 うう～ん、大体、言いたいことはわかるのですが、「アリストテレス以前の哲学者たちについての、アリストテレスによる記述（アリストテレスの哲学史）」は、「アリストテレス自身の色眼鏡を通して見られたものだという可能性」があるので、ChernissやJaegerらは、断片的にしか残されていない、アリストテレス以前の哲学者らの資料に基づいて、アリストテレスが、彼ら（アリストテレス以前の哲学者ら）に対して行なった批判的記述（アリストテレス（による？）批判？）を、本当にそうなのかどうか、再検討しようとした、ということでしょうか。
- 110 Q.2 昨日、部活の監督とメールでやりとりをしましたが、中々互いの意志が伝わらず・・・（中略）・・・やはり文字はlogosのかけだから使わないほうが良いですね。
- Q.3 ギリシア人は「ものを書く」ということをあまり重視していなかったのに、プラトンが著作を記したのはなぜなのですか。書きものよりも、講演のような形式のほうが当時の人々にとっては効果があったのではないのですか。
- 120 A.2, 3 これは、プラトンにとっても、哲学にとっても重要な問題です。プラトンの時代には、文字による文学等のジャンルの作品が、知識人の間では一定の影響をもってきていたという状況があり、プラトンは、この影響を無視して、ソクラテスのように、音声による対話や演説だけでは、哲学にとっては不利と考えたのでしょう。文字だけでは、哲学を完全に伝えることはできない、ということ強く自覚した上で、文字によって伝達できる部分は伝達するために文字を利用すればよい、という立場だと思います。ただし、文字
- 125 によるとしても、演説のように、一方的に長時間、話し続けるスタイルで書くのではなくて、できるだけ生きたことばに近い、対話の形で書くことを選び、沢山の対話篇を書くことになったのでしょう。
- 130 Q.4 プラトンの言う「この問題について～語られるものではないからである」云々は「以心伝心」、
「文（ママ、不？）立文字」と同じことか？
- A.4 仏教でいわれる「不立文字（ふりゅうもんじ）」が、仏教の真意は心で悟るべきであって、ことばで言い表わすものではない、ということであれば、近いでしょう。
- 135 Q.5 プラトンは「輪廻転生」についてどう述べているか？
- A.5 『国家』第10巻の「エルのミュートス」（614B～）を読んで下さい。ただし、オルペウス教の影響があることと、なにより、ミュートスであることを自覚して読むことが必要です。

140

Q.0 30人政権とは？成り立ち等について？

A.0 「世界史」の教科書に書かれている程度の知識で結構です。例えば、すでに推薦しておいた、ブラック（内山勝利訳）『プラトン入門』（岩波文庫）のp. 31以降に、プラトンやソクラテスとの関係に必要な情報は説明されていますので、読んで下さい。簡単に言えば、ペロポネソス戦争で、アテナイの敗北後、アテナイに成立した30人からなる独裁政権で、恐怖政治を行なったが、スパルタの介入で崩壊した政権です。プラトンに近い権力者（カルミデス、クリティアス）が参加していたり、後に、ソクラテスが訴えられる遠因にもなった政権です。

145

150 Q.1 プラトンがソクラテスの生き方が行動に大きな影響を受けたというのは、プラトンの周りにはそういった哲学者のような人が全くいなかったからなのですか。

A.1 そうではなくて、いたらしいけれども、ソクラテスが抜きん出て他と違っていたので、その影響力が絶大だったのでしょう。

155 Q.2 プラトンは最後、アカデメイアで哲人王を育てようとはしますが、プラトン自身が哲人王になろうとはしなかったのですか。

A.2 確かに、プラトンの哲学の中で、中期の『国家』では、王が真の哲学者になるか、真の哲学者が王になるか、という可能性がありましたが、現実には、現に王でない者が王になることは困難ですから、より実現する可能性があるのは、王になる予定の王子を教育して、いずれ王になったときに、真の哲学者でもあるようにすることだったので、プラトンは、この可能性にかけてシケリアへ赴いたのでした。しかし、よくあることですが、王子は、真の哲学者になる資質に欠け、プラトンの言うことに従わないので、この計画は挫折したのです。そこで、後期の『法律』では、プラトンは、理想の国家の実現をあきらめ、せめて、そこそこの資質の者が支配しても、せめて最悪の事態にならないように、次善の国家はどうしたら可能かを追求したのです。後のことですが、アリストテレスが少年期のアレクサンドロス（大王）の家庭教師をしたのも、その後のアレクサンドロスに何らかの影響を与えたのは確かでしょう。また、ローマのガリエヌス帝(253-268)は、プロティノスに学んで、幻に終わった理想的なプラトン市の建設を計画したことになっていますが、これには否定的評価が下されることが多いようです。また、哲人皇帝としては、マルクス・アウレリウス(121-180)が有名ですが、政治的には成功しませんでした。いずれも、王や皇帝だけが哲学を志して何かの施策をしようとしても、国家体制全体（具体的には周囲の人々）がこれに従わないので、上手くいかない実例です。

160

165

170

175 Q.3 . . . 政治に関わる人は選挙ではない方法で決められていたのですか？民主政治なので投票だと思っていました。

A.3 古代ギリシアの古代民主制と今の、例えば、日本の民主制とは全然違います（高校の世界史や政治経済では何を習ってきたんだ？）。ギリシアの古代民主制は、市民権をもつ成人男子の全員参加による議会とそこで選ばれた執行部が行政にあたります。投票し誰かを選んだり、何かを決めたりする必要があるときは、国民議会の構成員＝市民権をもつ成人男子全員だけが投票します。ですから、現代のように、国民全員が、代表を選挙で選ぶ代議員制ではありません。

180

185

Q.0 Turannosとは何か。

A.0 ローマナイズの仕方は、tyr annosで「専制君主」「暴君」の意味で、これを古代ギリシア史では、「僭主」と訳しています。恐竜のチラノサウルス *tyrannosaurus* の「チラノ」の部分、この *tyr annos* から採られています。現代英語で「暴君」は、*tyrant* (タイラント) でしょう。

190

Q.1 プラトンはある意味(ママ、ある意味で)犯罪者のソクラテスを持ち上げて死刑に追いやった民衆を非難していますが、ソクラテスの死後に危険人物として見られていたのですか。また、哲人王の思想は古代ギリシアの古代民主制と矛盾しますか。

195

A.1 プラトンだけでなく、ソクラテスの弟子を自認する人たちは一定数いましたから、「危険人物」の意味によりますが、アテナイ市民の間に、反ソクラテス派と親ソクラテス派の対立関係はあったと思われます。哲人王が専制君主制の王であるとすれば、古代民主制と専制君主制では両立しませんが、民主制の中で、執政官を民主的に任命するという形であれば、厳密な意味での王ではありませんが、実現可能かもしれません。ギリシア語で、

200

「王」は *basileus* といいますが、民主制の時代にも、*basileus* という名称の役職がありました(が、本当の「王」のような権限はありません)。

Q.2 プラトンはソクラテスの死後、メガラやキュレネーに行ったということですが、今でいうとどこらへんなのでしょうか。また、ピ(ママ、ピュ)タゴラス派はともかく、メガラ派やエレア派の思想というのは多少気になりました。

205

A.2 地図をみましょう。メガラ派やエレア派は、まず、自分で調べて下さい。

Q.3 アカデメイアで養成する人間が、哲人政治家に近い人間を養成するということがあったが、どんな人間でも学園に入れたということではなく、条件などの制限を設けていたのですか。

210

A.3 そもそも、入学するほうは、何かを学んで、世の中で活躍しようと思ってくるのは間違いないと思いますが、哲人政治家(か、哲人政治家に近い人間)になろうとおもって入ってくるのではないと思います。西洋史学のほうからは、調査不十分と言われるかもしれませんが、哲学的には、廣川洋一『プラトンの学園アカデメイア』を読んで下さい。

215

Q.4 ニーチェはプラトンの著作を「想起の手段の宝庫」としたのは分かりましたが、そのようにすることで、ニーチェ自身のプラトン著作への接し方は他の人とは違った特徴を持っていたのでしょうか。またニーチェ自身は言葉とか文字に対してどのように考えていたのでしょうか。

220

A.4 当時影響力のあった、シュライエルマッハーに、ニーチェは反対しているというだけで、当時も今も、ニーチェのような立場の人はいますから、この点では、ニーチェだけが他の人と違うということはありません。ただ、ニーチェは、講義では、著作よりも、プラトンという人物そのものを扱うと言っています(無理でしょうが)。また、ニーチェが言葉とか文字に対してどのように考えていたのかは、これ自体が卒論のテーマになるような大きな問題です。多くの箇所ですべていろいろなことを言っていますから、機会があれば、紹介しましょう。ただ、ニーチェ自身は、自分でも何故だかわからないが、書かずにはいられず、本心は、他人に読んでほしいのに、自分のために書いているのであって、読者のことは考慮していない、という態度をとっています。例えば、『ツアラトゥーストラ』の副題が、*Ein Buch für Alle und Keinen* となっているのが象徴的です。

225

Q.0 新プラトン派とは？

A.0 学派別系統図II（最初に配付）の右から2列目を見て下さい。紀元2世紀以降、アンモニオス・サッカスに始まり、プロティノス、ポルピュリオス、イアンプリコス、プロクロスらの、プラトンの哲学（とは言え、アリストテレスやキリスト教の影響も受けています）を受け継いだ人たちのことです。

Q.1 . . . 何故自分が後に見返せる（？）ように書き留めていたのでしょうか。後で考えが変わったときのため？そもそも自分の思想は後で忘れてしまうようなものだったのでしょうか？

A.1 そういうことではありません。プラトンの対話篇を何か読んだことがありますか。プラトンの対話篇には（特に、初期のソクラテス的対話篇）、問題の答が書いてありません。ある考えに至ったのは、どのような対話をして、そういう考えに至ったのかを思い出すための手がかりとして、対話篇が書かれている、と解釈しているのです。

Q.2 ギリシア語の写本は、単語それぞれの切れ目がなく、非常にわかりづらそうだった。あくまで原典にかえる場合、きれいに単語がかかれていない方をあえて使う意味はあるのでしょうか。

A.2 「あくまで原典にかえる」の「原典」の意味が誤解されているようです。普段、研究のために読むために使うのは、参考に配付した活字本です。必要があれば、手書きの「写本」を参照します。

Q.3 プラトンとは関係ないですが、授業の最初の方ででてきたエレア派についてゼノンのパラドックスはもう解決されていますか。微分などと関係があるのですか。またパルメニデスの「あるものはあり、あらぬものはあらぬ」について、空虚の中をアトムが運動するならば、アトム同士の間をどんどん拡大していくと必ず空虚があるはずなので、相互作用がなくなるはずなので空虚はなく「あるものはあり、あらぬものはあらぬ」と聞いたのですが（間違っていたらすみません）、これも現代の物理学の感覚からするとかなり違いますが、現代では相互作用というのはどのように理解されている、または、決められているのですか。

A.3 いくつもの問いが次々と繰り出されて、いい感じです。この疑問を解くために、自分で調べるともっといい感じです。さて、整理すると、以下の3点になるでしょうか。

1)エレア派についてゼノンのパラドックスはもう解決されているか。
2)アトムの中に空虚があると、相互作用がなくなるので空虚はない。だから、「あるものはあり、あらぬものはあらぬ」と聞いた（が、これでいいのか）。
3)現代では相互作用というのはどのように理解されているか。

1)は、無限の問題で、ゼノンには、「多への論駁」2つと、「動への論駁」4つが伝えられていますが、ラッセルはカントールによって解決されたとし、ベルクソンは、アキレウスに聴いてみなければわからないと言います。これは、エレア派のパルメニデス、ゼノン、メリッソスの三者の微妙な立場の違いを理解しなければなりません。

2)アトム（原子）とケノン（空虚）は、後のデモクリトスらの問題で、エレア派のあずかり知らぬことです。エレア派としては、ケノン（空虚）がない、とだけ言うでしょう。

3)現代の相互作用というのは、どういう場面かわかりませんが、被観察対象に影響を与えないでは観察はできない、というようなことでしょうか。

Q.0 プラトンのF写本の内容が、Tetralogia I~III, IV~VII という風にカンマで区切られている意味はあるのでしょうか。

280 A.0 F写本ではなくて、W写本のほうですね。W写本に含まれる対話篇は順序が混乱していて、IIIとIVの間が、p. 23の一覧の順序に並んでいないか、欠ける対話篇があるということですか。

Q.1 パピルスなど記録媒体についての話をお聞きしましたが、思想史と記録媒体の歴史を並べて考えてみたいなと思いました。

285 A.1 音声による対話は常にあるわけですが、我々にとってのカントのように、直接会ったことのない人の著作を読んだり、現在もネットによって情報を得たりする場合と、直接会ったことのある場合では、違いがあるのか、興味深いところです。

Q.2 プラトンのアカデメイアでの講義録というものはないのですか？

290 A.2 組織的にまとめたものはありません（というか伝わっていません）。しかし、プラトンの『第七書簡』や『パイドロス』などから分かるように、真の哲学は、直接の問答・対話によってしか伝えられないものだとする、対話篇には書かれなかったことがらが、プラトン先生の授業では語られていたかもしれないと思うのも無理もありません。古代においてすでに、プラトンの「書かれざる教説」ということが言われて、その内容が詮索されてはいますが、確かなことはわかりません。これに対して、アリストテレスの場合は、現在残っているのは、ほとんどが、リュケイオンでのアリストテレスの講義録か、講義用のノートの類いで、アリストテレスが公刊するつもりで書いた対話篇は、ほとんど失われて、今は、後代の人の引用によって断片的にしかわかりません。近世で言えば、ヘーゲルは、ほとんど著作（初期の神学論文、『信と知』『差異論文』『現象学』くらい）がなく、あとは講義録と講義の受講者用の要綱（『法哲学』）です。

Q.3 古代末期から中世へと移る際に、古代の書物がきびしく淘汰されたというのはなぜですか？

305 A.3 事実としては、古代の文献目録には書名があがっているけれども、その書物自体の内容が伝わっていないものが多数あることと、淘汰された理由としては、ひとつには、キリスト教の影響で、異教と見なされる内容の書物は、異教であるにもかかわらず、哲学的に特に価値を認められないと、写本がつかられ保存されることはなかったと考えられるからです。

310 Q.4 プラトンの著作だと偽って売り込んだ場合に、具体的に書簡の偽物はどれくらいの値で取り引きされたのでしょうか。

A.4 儲かったかどうか、値段等わかりません。西洋史学の分野ではもっと詳しいことが研究されているかもしれません。

315 Q.5 売り込むことを目的で作られた偽の手紙（書簡）などには何らかの価値はあるのでしょうか？

A.5 プラトンのものではないことがわかれば、当時、プラトンが他の人たちによって、どのように解釈されていたかがわかるので、哲学史的には意味があります。

前回のQ.1へ補足

325 A.0 前回の Q.1 では、「思想史と記録媒体の歴史を並べて考えてみたい」ということが
言われていました。前回のコメントでは、言及しませんでした。上山春平（『日本の思
想，土着と欧化の系譜』（同時代ライブラリー342），1998年，岩波書店）の中の，「中
井正一の「委員会の論理」」（前掲書，pp.247～260）を読んでいて，中井正一が，「言
330 われる論理」（古代），「書かれる論理」（中世），「印刷される論理」（近代）と対応
させて，論理思想史を考察することを提案していることを知りました。中井の論文は，
1935年2月～1937年10月の『世界文化』という雑誌に収録されたもので，著者は戦後
すぐ亡くなりますが，この時点で，こういう発想をしているとは流石だと思います。

Q.1 アレクサンドリアの図書館に偽物を作って売り込むことが行われた，とあるが，なぜ
特に手紙（書簡）の場合にそれが顕著になったのですか。

335 A.1 推測ですが，対話篇を書くには，それなりの才能が必要ですが，書簡は，既存の書簡
を真似て書きやすかったのではないのでしょうか。

Q.2 「後期では，Sophistes(Sophista)から，がらりと文体が変わる」と記載されていま
340 したが，同じ人物が前期と後期で文体が大きく変わるのには何か理由があるのですか。

A.2 私自身の例ですが，20代に書いたトマスに関する論文は，当時の先生の文体を真似
て，かたい言い回しで書いていましたが，その後は，今のような書き方になってしま
345 した。自分にじっくりくる文体を模索して変化したように思います。それが何かわかりませ
んが，書く人ごとに何か理由があるのかもしれない。

345 Q.3 対話篇が，Socratesが主役を演じるというのは，どういう風な主役なんだろうと，
実際に対話篇を読んだことがないので疑問に思えました。

A.3 是非，読んで確かめて下さい。

350 Q.4 プラトンの著作のうち前期には「to onti」（ママ），後期には「ontos」（ママ）と
いう表現が多く使われた，とありましたが，プラトンが一生を通じて好んだ表現や，例え
話などはあったのでしょうか。この表現や，例え話をだしていればプラトンの著作である
可能性が高いなどと指定できるようなものです。

355 A.4 "to onti"と"ontos"のどちらを使うかは趣味や好みが時期によって変わったという問
題ですが，"kata theon tina"（いかなる神のご配慮によってか）という言い回しは，プ
ラトンが好んで使っていたようですが，プラトンに固有なものではないので，質問にあるよ
うな，例え話はあるかどうかわかりません（たぶん，ないのでは）。

360 Q.5 プラトンの著作の執筆の順序はわからないことが多い中で，どうしてNomoiや
Epinomisが最後の著作ということがわかったり，Cratylus, Gorgias, Menoが前期の後の
ほうだということがわかったのでしょうか。

365 A.5 ソクラテスが登場するかどうか，登場しても活躍するか否か，そして，イデア論への
言及の有無など，内容によって判断しますが，NomoiとEpinomisについては，
anacoluthon（破格構文）といって，文法的に破綻した文が多くあり，それ以前の，十分
推敲された対話篇とは違って，読みこなすのが大変難しいのです。最後の作品だったので，
推敲する時間的余裕もなく，プラトンが亡くなったからだと考えられています。

Q.6 プラトンにとってギリシアの神々は中世の教父哲学の人たちのように重要なテーマになっていますか。ダイモンとはどういうものですか。

370 A.6 プラトンにとってギリシアの神々は、中世の教父哲学の人たちにとってのように、中心的な考察の対象にはなっていません。キリスト教中世においては、創造主としての神が重要なテーマですが、古代ギリシアでは、すでにある世界・宇宙を構成する一員としての神々だからです。しかし、その限りでは、ギリシアの神々も考察の対象にはなりません。他
375 方、ソクラテスのいうダイモンは、いわば、守護霊のように、各個人についているもので、先の神々とは異なります。プラトンの描くソクラテスの場合は、何かソクラテスが行動しようとする時、やってはいけないときだけ、禁止の合図を出す存在です。ただし、その合図が具体的にどういう合図なのかはわかりません。

Q.7 現代に伝わっているソクラテスの思想がどこまでが実際のソクラテスの思想なのだろうかと思いました。もしかしたら、全部プラトンの創作なのではないかと思いました。

380 A.7 ですから、プラトンの対話篇に登場するソクラテスに限って、それを研究対象とする Socratic Problems というジャンルができています。

Q.8 残っている文書から、いかにある人物についての思想を純粋なものとして取り出すか、という様々な工夫がこれまでなされてきたのですね。

385 A.8 今、授業で扱っているのは、古代ギリシアのソクラテスとプラトンの問題ですが、著作がもっと多く残っていて、言及・引用、ひどい場合は、剽窃などを文献学的に確認できる時代の場合は、もっと厳密な考証が必要になるし、古代の場合よりは考証が可能になります。例えば、有名な、福沢諭吉の『学問のすすめ』の名文句「天は人の上に人を造らず
390 ・・・・と云へり」は、最後の「と云へり」から分かるように、福沢自身の言葉ではなく、某家の家訓からの引用であることが分かります。これは、「と云へり」と言っているだけで、当時は、引用のルールが今のように確立しておらず、典拠が示されていないので、これを調べるのが、福沢研究者の仕事になるわけです。しかし、盗作や剽窃になると、出典を意図的に隠しているのだから、これを突き止めるためには、相当の学殖が必要です。次の例は、今道友信（『知の光を求めて』、2000年、中央公論新社、pp. 115～116）が、
395 先生の伊藤吉之助から聞いたことをもとに、報告していることですが、ハイデッガーの有名な、In-der-Welt-Sein（世界内存在）は、岡倉天心が『茶の本』（原典は、英語で、*The Book of Tea*）の中で、莊周の「処世」を英訳して、Being in the World としたのを、さらにドイツ語訳されたものを読み、それをそのまま、ことわりなしに使っているというのです。詳しく言うと、伊藤吉之助（東大教授）が、ドイツ留学から帰国する際、世話になったお礼に、ハイデッガーに、岡倉天心の『茶の本』のドイツ語訳（1908年）をプレゼントしたのが、1919年。そして、In-der-Welt-Sein（世界内存在）が出てくる有名な、*Sein und Zeit*（『有と時（存在と時間）』）が世に出るのが、1925年です。ハイ
400 デッガーは、何の断わりもなしに、まるで自分が考えだしたかのように、In-der-Welt-Sein（世界内存在）と言っています。出版・公表の時間的前後関係は明らかでも、当該の人物が読んでい
405 かどうか分からないことがあります。ハイデッガーの場合は、伊藤吉之助の証言から、限り無く、読んでい
410 る可能性が大きいと言えます。従って、伊藤吉之助からもらった天心の『茶の本』のドイツ語訳 *Das Buch vom Tee* 中の In-der-Welt-Sein をよく言って、借用、ひょっとすると、盗用、わるくすると、剽窃していると言わざるを得ません。もっとも、莊周の「処世」というのは、天心が基づいたのは、直接的には、『莊子』のほうではなくて、『淮南子』ではなかったかと思われま

415 Q.0 プラトンは、「独創」が多くの場合虚構にすぎないということをよく知っていた、とあるが、どういうことなのか。文字を書くことでは相手に真意が伝わらないということですか。

A.0 p. 30, l.1350以下の記述ですが、ここの「独創」の内容は、その続きを読めばわかるように、「イデア論」や「哲人王」それに「魂論」などの、プラトン自身が「独自に考えて創り出した」という意味で、「独創」です。（後の授業で扱う）「魂論」の内容を別にすると、「イデア論」も「哲人王」も現実の世界で他に認める人がいない「虚構 (fiction)」であって、世間の人々にとっては、現実には存在しない「つくりばなし」すなわち「虚構」であるということを知っていた、ということです。（プラトンにとっては「虚構」ではないでしょうけれども）文脈から切り離して、語句だけを取り出すと、意味がわからなくなる例ですね。

Q.1 Socrates と Sokrates の違いは何ですか？

A.1 同じことです。ギリシア語の Σωκράτης を、ローマナイズするときに、Socrates と Sokrates の二通りの書き方があって、プリントでは方針が一定しないので、両方で書かれているということです。ギリシア語の教科書の p. 1 の音価とページ下の註を見て下さい。

Q.2 今日の講義の中で出てきた引用問題を大変難しいものだと思います。本当に引用を気にした場合、「」だけの論文ができてしまいそうです。

A.2 そうですね。どこまで著者の著作権を認めるか、という問題があるのですが、誰もが使っている辞書的な意味や言い回しは、引用ではないので、そのまま使うべきですが、私が学部生のとき、授業を受けて心密かに敬愛している、教育学の佐々木享先生の論文は、表題にまで註が付いていて圧巻です。

Q.3 プラトンの『書かれざる教説』（ママ、著作ではないので、「」でよい）についてアリストクセノスは具体的にどう述べているのですか。アカデメイアに通わぬならば、プラトンは理解できないと、現代人を突き離（ママ、放）すようなことを述べていたのですか。

A.3 アリストクセノスは音楽理論家で、アリストテレスの弟子にあたる人です。彼が具体的にどうか述べていれば、それが問題になって研究されるはずですが、述べていたかもしれませんが、アリストクセノスの書いたものは、音楽理論書以外、まとまったものは伝わっていません。しかし、ディオゲネス・ラエルティオスの『哲学者列伝』は、アリストクセノスには、『プラトン伝』他の著作があったらしく、断片的に何回も引用されています。ですから、何とも言えません。しかし、そもそも、問題は、アリストクセノスは、最初、ピュタゴラス派の影響を受けて、その後、アリストテレスの弟子になった人ですから、時代的に、アリストテレスよりもプラトンから遠いのです。そして、アリストクセノスがプラトンについて得た情報は、プラトンを直接知っていたアリストテレスから聞いた話なのです。それなら、アリストテレスがプラトンについて書いていることのほうが、より、プラトンに近いと言えるでしょう。なお、確かに、アリストクセノスの『和声学』で、アリストクセノスがアリストテレスから聞いた話として、プラトンの「善について」の講義の中で、プラトンが、「善は一である」というようなことを言った、ということが伝えられています。しかし、これだけでは、プラトンの講義の全体や趣旨を知りようがありません。そこで、研究者はあれこれ詮索するのですが、資料が少なすぎて、ほとんど推測の域をでません。

- 460 Q.4 プラトンの対話篇を読んで論評する課題があるということでしたが、何かおすすすめと
いうか、課題として扱うに適している対話篇があれば、教えていただきたいです。
A.4 自分の興味のままに自由に選んで下さい。
- 465 Q.5 プラトンが書かれた文字をあまり評価しないのは、自分が考えていることと書かれた
こととの間のギャップを鋭く感じ取るから、とあるが、対話でも、自分の言いたいことを
言葉でうまく表現できないことがよくあります。それでも、対話の方が優れているのは、
相手の反応で考えがどの程度伝わっているの(か)が分かるからですか。
A.5 その通りです。直接、相手に質問することによって、相手の理解度を確かめ、違って
いれば訂正できるからです。授業のプリント、p.7~8(序説への補足)参照。
- 470 Q.6 スレザークのプラトンがプロセスを重んじたためにもらしてはいけない、という説に
よると、きちんとプラトンを読むために、私たちが勉強する時の書物の順番なんか『プ
ラトンを読むために』に書いてあるのでしょうか。
A.6 対話篇を読む順序はあまり重要ではないと思います。授業でもいずれ言及しますが、
ひとつひとつの対話篇は、それぞれが何らかのテーマをもって書かれているので、それぞ
475 れで完結している、とも言えるからです。スレザークの主張のポイントは、プラトンの対
話篇は、それを読んだら、何かわかって、納得する、という著作ではなくて、「ヘー、
こういう問題があるんだあー。それにいろいろな考え方があるようだけれども、まだ、誰
もこれが唯一の正解だ、というものに到達していないんだあー。ようし、自分でも考え
てみるぞおー」という気持ちに読者を誘うことが目的で書かれている、ということです。
480 ですから、何かプラトンに教えてもらおうという受動的な態度で対話篇を読む人は、プ
ラトンを読んでも無駄だ、ということです。つまり、プラトンの対話篇は、読者にとって、
「哲学への誘い」「哲学への勧め」なのです。「哲学への勧め」をギリシア語では、「プ
ロトレプティコス」と言います。是非、スレザークの本を自分で読んでみて下さい。
- 485 Q.7 プラトンがみずからの思想について具体的に分かるように努力した文章はやはりどこ
にもないのでしょうか。「対話によってのみ伝えることができる」という考えは、まず文
字にして伝えようとした努力があって起こるとということが分かりましたが、プラトンは
時期でいえば、いつごろその境地に達したのでしょうか。
A.7 プラトンのみずからの思想について知る手がかりは、対話篇と書簡しかありません。
490 授業でも、頻繁に引用してプラトンの生涯を知る拠り所とした、第七書簡を書いた時点
では、質問の境地に達していたと言えるでしょう。第七書簡は、シュラクサイでディオ
ンが暗殺された後、ディオンの人々がプラトンに送ってきた書簡への返事という形で書か
れているので、かなり晩年ですから、これ以前に、アカデメイアを設立して、こう行く活
動を行っていた時期と考えるのがあたっているかもしれません。
- 495 参考文献・・・どれか1冊は読んで下さい。
・R. S. ブラック/内山勝利訳、1992年、『プラトン入門』、岩波文庫・・・第七書簡の
翻訳を含む。
・バーネット/出隆、宮崎幸三訳、1952年、『プラトン哲学』、岩波文庫・・・バーネッ
500 ト=テイラー説。しかし、多くの点で示唆に富む。
・藤澤令夫、1998年、『プラトンの哲学』、岩波新書。
・斉藤忍随、1972年、『プラトン』、岩波新書・・・主な対話篇の紹介を含む。
・アラン/森進一訳、2010年、『プラトンに関する十一章』、ちくま学芸文庫。
・スレザーク(内山勝利他訳)、2002年、『プラトンを読むために』、岩波書店。

Q.0 本来的な「よい」とはどういうことですか？授業の中で先生が、相対的「よい」ではなくて、．．とおっしゃっていましたが、皆にとって「よい」ということでしょうか？また、本来的な「よい」をソクラテスは獲得(?)することができたのでしょうか？それとも「よい」は永久に追い求めていくものだったのでしょうか？

510 A.0 本来的な「よい」は、誰かにとって「よい」という、相対的「よい」ではないことは確かですが、皆にとって「よい」ということであるとも限りません(皆にとって「よい」ことが、本来的に「よい」ことであることはあり得ますが)。しかし、全ての人が「よい」ということが、本来的に「よい」ことでない場合があります。ソクラテスが追求している、本来的に「よい」ことは、それ自体として「よい」ことです。そして、少なくとも、対話篇では、ソクラテスは、それが何であるかに到達していないように思われます。その方向を示しているだけのように思われます。

Q.1 相対主義の人はみんなソフィストになるのですか？また、ソフィストたちは自分では哲学者を自称していたのですか。

520 A.1 ソフィストの多くは、価値判断に関して、相対主義であると思われませんが、別の時代にも、相対主義の立場の人はいますが、彼らをソフィストとは呼ばないでしょう(比喩的には呼ぶかもしれませんが)。一括してソフィストと呼ばれますが、彼らが、他の学派をなす集団と大きく違う点は、ソフィストとまとめて呼ばれるけれども、それぞれのソフィストは、紀元前5～4世紀に、アテナイで活動した、集団をなさない個人プロダクションのようなもので、学派というよりは、ソフィスト現象とでもいうべきものです。ソフィストは、人によって、それぞれ違うので、ゴルギアスは、「弁論術の教師」と言っていますし、本来、ソフィストには数えないほうが適切な、イソクラテスは、自分の教えることを「哲学」と言っています。

530 Q.2 「無知の知」というと無知を肯定化する(?;肯定する)ように聞こえますが、もし知が人間の幸福のためだとしたら、やはり無知をどうにかしないといけない。幸せになるためには、という??(判読不能)になって、ちょっと矛盾しているなと思った。

535 A.2 まったく誤解していますね。ソクラテスの「無知の知」は、自分が無知であることを知ってそれで終わるような呑気なものではありません。そうではなくて、もっと積極的・能動的に、本当は知らないくせに、知っているつもりになっている他人を鋭く糾弾するとともに、ソクラテス自身も若い頃は、自然学の研究に熱心に取り組んだ(アナクサゴラスの所説を研究した)りして、自分の知を拡充することに能動的に取り組んでいます。

Q.3 「無知の知」に関して、Soc.は「自分と他人の知の状態を吟味・批判して無知を悟らせる」とあるが、Soc.自身は自分自身の「無知の知」に関してどのように考えていたのか？

540 A.3 Q.2と関連する問いですがソクラテスは、「デルポイの神託」の内容が、ソクラテスが最も知者である、ということに疑問をもち(というのは、ソクラテス自身は、自分が何も知らないと思っているので、なぜ、自分が最も知者といえるのか疑問に思った)、世間で、知者と言われる人々を訪ねて、問答をしてみたところ、その人たちは、自分の専門でない分野については何も知らないのに、何か知っているつもりになっていることを、ソクラテスは発見します。そこで、ソクラテス自身は、他の人と違って、自分は知らないことを知らないと思っている、と気付きます。これが、自分が知らない、という事実を、その通りに認識する、「無知の知」です。そして、ここを出発点として、本来の知の探究を始めることができるのです。

550 Q.4 ソクラテスは「悪と知りつつ、それを行なう」ということはあり得ないという例を用い、本当に知っていると言われ得る状態のことを示しているが、これは道徳的側面のようなものは考慮してい

ないのですか。例えば、盗みは悪いことだけれど（ママ；けれども），それをしないと人が救えないとする場合、盗み悪と知りつつ、それを行なう，という状況があるのではないかと思います。

555 A.4 例に挙げられた，人を救うための「盗み」は，本当の意味での「盗み」ではないということになるでしょう。その状況下で，「盗み」とされる行為をしなければ，人を救うことが出来ないのならば，そのような所有形態を許している国家の状態が正しくない，ということになるでしょう。実際，ソクラテスは，悪法も法ならば，守らなければならない，とする一方で，臨時の独裁政権である三十人委員会の命令には，従いませんでしたから。

560 Q.5 私は何かを知っているのに，何も知らないと思い込んでいる場合もあるのではないのでしょうか。無知を知ったと思い込んでいる状態です。それはある意味では考えることを放棄していることになるのではないのでしょうか。

A.5 いわば，「知の無知」ですね。ただ，「私は何かを知っているのに，何も知らないと思い込んでいる」のは，ぼけているのですか？それとも，自分が知っていることに自信がないのですか？いずれにせよ，それは，本当に知っていることにはならないと思います。

565 Q.6 プラトンの対話篇などの著作からは思想を得るというよりは，考える機会を与えるようなものだと言われていたのが印象的でした。プラトンは思想家，哲学者でありながら教育者という側面が強いのかなと思いました。

570 Q.7 対話篇の対話・問答についての話や，対話篇が答えがあるものでなく，その先を考えさせるためのものである，というところから，プラトンはとっても優れた教育者だなあと感じました。「考えることが大事だよー」と言ってくれているような人ですね。

A.6 & 7 前回にも指摘しましたが，プラトンの対話篇は，読者にとって，「哲学への誘い」「哲学への勧め（プロトレプティコス）」なのです。

575 Q.8 プラトンは思考ということをして，「魂が魂自身を相手にして行なう対話だ」と述べていますが，そう考えると，プラトンの対話篇はほぼプラトンの思考を表現したものではないかと思うのですが，どうでしょうか。例えば，ゴルギアス（ママ，『ゴルギアス』）におけるゴルギアスとソクラテスの対話は，プラトンの魂と魂自身の対話をやらせているだけではないのでしょうか。

580 A.8 その通りですが，だったらどうだと言うのですか？精確に言えば，プラトンが文字で対話篇を書き始める直前までは，確かに，プラトンの頭の中にあつたことである，という意味で，「プラトンの魂と魂自身の対話」には違いありません。しかし，だからといって，書かれている事柄はすべてプラトンの考えとは限りません。『ゴルギアス』について言えば，現実のゴルギアスの発言や考えをプラトンは知っていて，それを取り入れて，しかも，それをより強力な議論に仕立てて表現しているのですから，対話篇を読む我々は，ゴルギアス自身の考え方も，知ることができるわけです。そもそも，585 プラトンが，ゴルギアスの発言内容や考え方を知らなかったら，ソクラテスとゴルギアスの対話を書くこともできなかつたでしょう。そして，このことは，プラトンの対話篇に限らず，他の人の著作についても，ある程度までは言えることです。

590 Q.9 「それが本当に正しいと思うなら，善だと思ふなら，必ずそう行動するはずである」とソクラテスが言うのは，ソクラテスの生きた時代は「正しいと信じるなら行ってよい」というような風潮があつたからでしょうか。それとも突出してソクラテス本人が抜きん出て自由な発想を持っていたのでしょうか。それともソクラテス本人や当時の人々が何かの圧力で苦しめられていたことが少なからず要因になつたのでしょうか。とりあえず，図書館で哲学の歴史を読んでみて考えてみます。

595 A.9 ソクラテスは，他の人と違って突出した発想をもっていたことは確かだと思いますが，ソクラテスの時代や当時の風潮などについては，何とも言える知識がありませんので，是非，図書館等で調べて，わかつたら教えて下さい。

600 Q.0 「Xとは何であるのか？」→「何がXであるのか？」という風に普通の人は考えてしまうという話は確かにそうだと思います。人はやはり抽象的な事物をそのまま具体的なものを通さず考えるのは苦手（というより嫌悪？）なのかなと思いました。

A.0 プラトン（登場人物としてのソクラテス）は、答え手が、具体的な事物を答えるであろうことを予想して、わざとこういう質問をしているように思われます。

605 Q.1 「Xとは何か？」という問いに対して、「Xは～である」という即物的な答えをたとえ無限に重ねたとしても、Xのすべてを知ることはできないということでしょうか？

A.1 Xに相当する個物が有限個であれば、どんなに時間がかかっても、すべてを尽くすことが原理的に可能ですが、現実には可能ではないでしょう。

610 Q.2 「～とは何であるか」という問いに対して即物的な答えをしても、それをいくつも挙げて、それらの共通する部分を探していけば、「～」に近づいていくと思うのですが。

615 A.2 これは、Q.1の続きということになりますが、たしかに、個別の事例を多く挙げれば挙げるほど、「～」に近づいていくと考えられ、この方法は、いわゆる帰納法（アリストテレスは、epagoge:エパゴゲーと言っています。ラテン語では、inductio）です。しかし、「～」そのものではないので、事例の数に依存する確率論的な議論として扱われます。

Q.3 改めて考えてみてイデア論とはいろいろなことに関わってくるのだと思った。難しい。

620 A.3 イデア論には、いろいろな側面があって、例えば、この世界の成立を静的staticに捉えた場合、個々の事物や状態を成り立たせているイデアと個物の関係が問題になりますし、
625 世界の変化を動的dynamicに、どのように説明するかという場合は、事物の原因としてのイデアを考えることになります。以上は、存在論的な問題の扱い方ですが、人間が、これらの事態を理解する際に、どのようにして理解することができるのかという認識論的な場面でも、イデアとの関係が問題になります。そして、善や美などの価値判断にかかわる場面でも、イデアは問題になりますから、イデア論は、哲学が問題にすることをほとんど全て扱うことができるという意味で、適用範囲が広く、射程距離が長いと言えるでしょう。

Q.4 プラトンは、ソクラテスを知っている人に向けて書物を書いたのでしょうか。万人を意識していたというわけではないのでしょうか。

630 A.4 わかりません。ただし、少なくとも、ソクラテスが登場する初期の対話篇は、現実のソクラテス（これは、ソクラテス以外の登場人物についても言える）を知っている人たちが読んでも、違和感がないように配慮して書かれていると思われるので、主に、プラトンと同様に、ソクラテスの周囲にいた人たちと、アカデメイアを作ってから、プラトン自身の弟子たちを读者として想定していたと思われる。それに、万人と言っても、当時のギリシア語を理解できる人たちに限られますから、後世のギリシア語以外を使っている人
635 たちを想定していたとは考えられません。度々紹介している、スレザーク[（内山勝利他訳）、2002年、『プラトンを読むために』、岩波書店。]が扱っているのもこの問題です。

640 Q.5 「美しさとは何か？」と問われてostensiveな答えしか返せないことは、人間の限界を表していると思います。詳しいわけではないですが、カントの物自体の考えに近い気がします。（カントがプラトンの影響を受けているのかもしれませんが。）もう美しさ自体は知り得ないのではないのでしょうか。ソクラテスは『パイドーン』（もしくは『クリトー

ン』?)で、魂は肉体の牢獄から抜け出す必要があると述べていたと思いますが、やはり
美しさ自体を知るには、肉体から離脱する他ないと思います。(魂が肉体から抜け出した
としても美しさ自体に触れられる保証はありませんが、肉体の中に留まっても無駄な
ので。 . . .)

A.5 「美しくしさ」そのものは、イデア的なものですが、プラトンに限らず、ギリシア人
に共通して、認識論的には、等しいものによってそれに等しいものが知られる、という考
え方があります。アリストテレスの用語法では、現実の世界にいる我々生きている人間は、
形相(魂)と質料(肉体)から構成されていますが、イデア的なものは、質料をもたない
という点で、形相的です。従って、形相的なものは、形相、すなわち、魂によってはじめ
て捉えられる、逆に、形相(魂)と質料(肉体)の結合体である、我々生きている人間は、
質料(肉体)の妨害を受けて、分かるとしても、不完全にしか、イデア的なものを捉える
ことができない、ということになります。そこで、プラトン研究の中では、イデアの今生
認識の可能性が問題になりますが、答は否定的でしょう。

また、カントの「物自体」については、いろいろな解釈があるでしょうが、就職論文
(1770年)の時期と『純粋理性批判』(A版1781年; B版1787年)以降を区別して理解す
る必要があると思います。就職論文 *De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et
principiis* (感性界および可想界の形式と原理について)では、感性と悟性を区別してい
る点で、『純粋理性批判』と同じであるけれども、悟性によって物自体を認識し得ると考
え、感性によって認識される世界だけを現象としている点が、『純粋理性批判』と異なり
ます。つまり、感性は現象に関わり、悟性は可想界に関わるとされています。しかし、こ
の後、ほぼ、10年後の『純粋理性批判』では、さらに、悟性と理性の区別、範疇と理念の
区別が導入され、先験的感性論(感性)、先験的分析論(悟性、範疇)、先験的弁証論(理
性、理念)のうち、先験的感性論と先験的分析論の範囲では、物自体の認識は否定されて
いるのです。では、先験的弁証論の範囲ではどうかというと、いまだ、先験的分析論の読
解・理解も十分できていない自分としては(読み始めてから32年になります)、自信をも
つて言えませんが、先験的弁証論でも、物自体の認識は積極的に肯定されてはいないけれ
ども、そうかといって、完全に否定されているわけでもなくて、いわば、オープンにされて
いる、という感じです。というのも、カントにとっては、形而上学一般を否定すること
ではなくて、従来(カント以前)の形而上学の不備を批判して、「物自体」の認識を可能にする形而上学を
構築することが目標であったと考えられます。実際、『純粋理性批判』A版の2年後
(1783年)に公刊され、『純粋理性批判』の内容を解説したような内容になっている
*Prolegomena zu einer jedenkünftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten
können*(『来るべき学としてのあらゆる形而上学に対する序説(プロレゴメナ)』)の書名
は、カントが形而上学を放棄していないことを示しているからです。

プラトンの対話篇は、「~」そのもの、つまり、イデアを指し示す方向を読者に示唆し、
カントは、物自体の認識を目指しながら、人間の理性の限界を自覚して、その方向を希求
する途上にある、という点で、似ていると言えるかもしれません。

690 Q.0 恋の神がErosと呼ばれることに異和感(違和感)がありますが、きっと現代でのエロスの意味を私が想像しているからだと思います。Erosのもともとの意味をあとで調べてみようと思います。

695 A.0 エロースは、「貧しさ(Penia)」が己の苦境を逃れようとして「工面の良さ(Poros)」と野合を遂げて生んだ混血児なので、他者への憧れこそ愛の本質であり、主観(主体)が、対象(客体)を自己に取り込み、自己拡張する点に特色があるのに対して、アガペーは、主観(主体)ではなくて、客体のほうを中心である点に特徴があり、これを理解するのはとても難しいと思います。波多野精一『時と永遠』(岩波文庫)の中の、第七章「エロースとアガペー」と、Nygren, *Eros und Agape* (ニグレン『エロースとアガペー』)を参照して下さい。

700 Q.1 アイデアについて語る場面で、ソクラテスの言行を一步超えた思想を語ろうとする際のプラトンの工夫ではないかと思われる、とされているが、そこがプラトンの積極的に主張したい部分であると受けとめてもいいのですか。

A.1 よいと思います。

705 Q.2 「魂の中に肉体が存在する」この考え方は、現在一般に認識され、認められているか?(自分には大変興味深い考え方と感じたが)

A.2 ほんとはどここういう発想をする人はいないと思います。そもそも、肉体は、物体であり、空間的広がりをもちますが、魂は非物体的であり、空間的広がりをもつかのように表現するのは、あくまでも比喩的に行なっているのです。

710 Q.3 魂の中に肉体、というのが不思議な感じだなと思いました。「アイデアに憧れる」というのは、高校の授業でも聞きましたが、生物でないものが何かに憧れる、というのも不思議な感覚だなと思いました。

A.3 不思議ワールドを楽しんで下さい。

715 Q.4 Soc. のErosについてのDiotimaの奥義ですが、p. 41, 1から2への、「肉体愛から精神の愛」への発展は分かりましたが、2から3の移行がよく分かりません。2の段階では精神愛への扉が開かれただけで、3でしっかりと精神愛の世界にのめりこむ、ということでしょうか。

720 A.4 大体、そういう理解でよいのかもしれません、やはりちょっと違うと思います。Symp. 210以降を読んで自分で確かめて下さい。2.は、個々の肉体から精神へ、と言っている、個々の人の精神へ移行する、という意味で、3.は、もっと一般的に、個々の人に限定されない知的活動、学問や芸術等へ移行する、という意味なので、エロースの対象となる精神が、2.では個人のものですが、3.では個人に限定されない、ということを行っています。

730 Q.5 「まさに美であるところのもの」は、常にあり、生成したり消滅したりしないと書かれています、生成されなければ、なぜ存在するのかと疑問に思いました。生成されないというのは、人の手がかかっていないと解釈してもよろしいのでしょうか。また「醜」とは、「美」のアイデアから外れたものを示すのか、それとも「美」と同じように「醜」のアイデアが存在して、それに該当するものを示すのでしょうか。

735 A5 「生成したり消滅したりしない」で存在するものは、初めから存在しているものであつて、なぜ存在しているのかなど、人間の知り得ることではありません。ですから、「人の手がかかっていない」というのは、ある意味では正しいですが、また、ある意味では違います。また「醜」は、「美」の対極にある、いわば、対概念的なものです。『パルメニデス』篇では、対概念的なものの両極に、アイデアを想定する可能性も示唆されていますが、これは論理的にうまくいかないで、その後のアイデア論の歴史では（古代でも中世でも）、
740 「善」や「美」などの優れた価値をもつアイデアだけを想定しておいて、「悪」や「醜」は、「善」や「美」などの価値あるものの欠如(privatio)として説明する方向にあります。ですから、個物がアイデアを分有するということと、逆に、欠如するということが大切な考え方になってきます。

745 Q6 美が美としてありながらも全てのモノに内在しているというのが面白いと思いました。個々のものがそれぞれ美から美を分けてもらう、ということは最初から個々のものは美をもっていないということなのでしょう。それとも個々の本来持っている美にきちんとした輝きみたいなものを与えるのが美なのでしょう。真面目に考えてみようとしてもやっぱりたどりつけそうにないですね。

750 A6 個々のものは、質料・素材・物質(hyle)からなり、これに何らかの形相(eidos)がかかわって、実際の個物になると考えられますが、物質は、本来、価値のないもの（つまり、価値のあるアイデアの反対物）と考えられているふしがあります。プラトンにおいては、それほど強調されていないかもしれませんが、後の、プロティノスになると、質料は、悪でさえあって、アイデアのように価値あるものに与らないと救われようがありません。つまり、
755 「個々の本来持っている美」などは、個物の質料にはまったくありません。このように、現実の物質の世界をきわめて否定的に観る古代の人たちの発想を理解しないと、なぜアイデアのような発想がでてきたのかはわからないでしょう。そして、実際に、例えば、『パルメニデス』篇では、現世の人間には、アイデアそのものは知り得ないとされています。

760 Q.7 魂となって肉体から脱獄しても、二頭立ての馬車に乗った神々にたぶらかされるだけというのは悲しいです。中国では死後の世界へ引き続き現世の財産をもっていけるように、紙でできた模型(ex. 車, 家, 金, ケイタイなんかも)を棺に入れて、死者と一緒に焼く文化があると、アジア文(？史)の講義で教えてもらいました。だから、現代人は、スポーツカーの模型を棺に入れておいて、死後の世界では神々の後をつけるのがいいかな、とも思いました。

765 A.7 棺には、後に残った者が後始末で困らない範囲で、なんでも入れてやればいいのか、

Q.8 エロスの他に、友人や家族との間の愛も美しさで同様に説明していますか。また、今日の授業と関係ないですが、プラトンとアリストテレスの他に、古代ギリシアの哲学者で、
770 まとまって著作が残っているのは誰がいますか。

775 A.8 プラトンの『饗宴』は、恋人を念頭においた話です。（『饗宴』を読んで下さい）そして、これはあくまでもミュートス（神話）として語られているだけです。友人や家族については、アリストテレスがピリアー（友愛）という概念で説明しています。（『ニコマコス倫理学』を読んで下さい）それから、まとまって著作が残っている、と言えるのは、プロティノスとプロクロスでしょうか。分量だけからいえば、アリストテレス註解ですが、シムプリキオスやピロポノスも大量に残っています。

780 Q.0 p. 42 の1910 行にある"Soc.の与えた「知る」ことの自然本来の意味"をいまいち理解できずにいます。

A.0 その前の1909行の「実感性や個性性、具体性」をそなえた「知る」ということです。

Q.1 H. Bergsonの色の例が何を伝えたいのかよく分かりませんでした。

A.1 ベルクソンのテキストを読んでみて下さい。

785

Q.2 Ravaissonのアイデアと色が似ているという喩えがイメージしやすかったです。

思惟されるものの説明は可能なのでしょうか。感覚されるものを説明していくうちに、思惟されるものにとどりつけるような気がするのですが。

790

A.2 ベルクソンは、虹を例に取り上げて、ラヴェッソンの哲学の方法を語ろうとしているのですが、その語り方をどう捉えるか、つまり、「説明」や「たどりつく」という表現をどういう意味で使っているかが問題です。ベルクソンがやろうとしていることは、プラトンの場合、感覚と思惟は、まったく別物で、連続しているようなものではないけれども、感覚によって捉えられる色の例を喩えとして、思惟の対象であるものを説明しようということなのです。ですから、「感覚されるものを説明していくうちに、思惟されるものにとどりつける」というのが、連続的なものとして理解されているならば、それは、まったく違います。感覚をいくらたどっていても、思惟には至りません。感覚の例である色の喩えを聴いて、感覚とは別物である思惟の場合にも、そのような類似のことがある（例えば、アイデア）ことを、直観的に（ハッと）気づくことができるかどうか、そういうセンスのよさが問われているのです。

795

800

Q.3 自分の考えとしてではなく、他の人の考えとして喋らせるのは便利ですね。

A.3 プラトンの巧妙な手法です。

805

Q.4 アイデアは直接感覚の対象たりえないために、思惟することによってアイデアの解釈をしようとしたのですか。

A.4 アイデアは、感覚の対象になりえないのはもちろん、身体をともなって生きている人間の思惟の対象になるかどうかさえ、答は否定的です（アイデアの今生認識の問題）。

810

Q.5 感覚の示すものは虚妄であるという言葉聞いて、デカルトを思い出しました。

A.5 しかし、感覚に現れているものは、たしかにその通りであり、そのようなものとしてしか知りようがないはずですが。その限りでは、感覚に現れているものは、虚妄ではなく、その通りのものなのです。しかし、例えば、遠くに、人の姿が見えたので、そこまで近づいて行ってみると、人ではなくて樹木だった、というとき、遠くから見えた人の姿は、たしかに人の姿だったことには間違いはない、と言えるでしょう。

815

820

825 Q.0 善（正しい）とは悪（あやまり）と対応する善なののでしょうか？あと善が認識の基礎とありますが、たとえば美について語る時に善・正しいかどうか、は問題になるのかな、と疑問です。

830 A.0 これは、存在 (is, ある) と当為 (ought to, べき) のどちらをより根源的であると考えるかという問題です。存在と価値の問題と言ってもよいでしょう。プラトンは価値のほうをより根源的であると考える、それを「善（のイデア）」という言い方で、比喩的に表現しているのだと思います。

Q.1 善が存在の根拠であり、そこから他が存在するというのは分かる気がしないでもないんですが、結局よく分らないです。

835 A.1 現代人にはよくあることです。

Q.2 プラトンは価値（～すべきこと）の中に、存在（～である）が含まれるとして、価値の方を高次元のものとしています。しかし、物事の本質を探していくと、やはり存在に着目する方が自然な気がします。

840 A.2 Q.1と同じく、現代人にはよくあることです。

Q.3 そんなに昔から唯物論があったということに驚きました。認識の話は色々な考え方があるので難しいけれどおもしろいです。

845 A.3 古代から、唯物論はあります。どこまで徹底しているかによって程度の差はありますが、ギリシアでもインドでも。そういう意味では、2000年、3000年前から、人間の発想はそれほど変わっていない、ということだと思います。

Q.4 ベルグソン（ママ、ベルクソン）の文章を見ましたが、フランス語は読みが難しいですね。見当もつかない読みが多くてゾクゾクします。

850 A.4 C'est épatant! (セ・テ・パタン)・・・しかし、フランス語の発音は、英語よりよほど規則的で、例外がなくて分かりやすいのですが、...

Q.5 ラヴェッソンさんの話を聞いて、抽象的なとらえ方をする人々を批判しているところにはっとしました。色もイデアも、なかなかとらえにくいものであるにしても実在するものだという事ですね。

855 A.5 そうです。ベルクソンが指摘するラヴェッソンの考え方として、この具体的な、赤、黄・・・等に対して、白色（というか透明な）色（というか光）が、ちょうど、個物（具体的な物）に対するイデアに例えられる話は、優れた解説の仕方だと思います。透明なので眼に見えないけれども、確実にある、というところがポイントだと思います。

860 今回のコメントとこれまでのコメントは、pdfにして、下記のURLに、後日、掲載する予定なので、他の授業関係のファイルとともにご覧下さい。

home.hiroshima-u.ac.jp/akya59/lectures_index.shtml/

865

Q.0 前期の間、お世話になりました。ありがとうございます。レポート頑張ります。

870 A.0 レポート、楽しみにしています。

Q.1 dianoia 悟性的思考の悟性とはどういう意味なのでしょう。理性とは違うのでしょうか。

875 A.1 授業でも説明したように、nous 理性が、一瞬に一挙にすべてを直観的に把握してしまうのに対して、dianoia 悟性的思考は、時間をかけて、順々に計算したり証明したりして何かを把握する能力です。

Q.2 プラトンのイデア論が悪しき形而上学だとすると、善き形而上学とはどういうものですか。

880 A.2 「プラトンのイデア論が悪しき形而上学」だとする立場からすると、そもそも、形而上学は善きものではありません。従って、形而上学は存在しない、ということになるのではないのでしょうか。ところで、今回の西洋古代哲学史概説の講義は、そもそも、「プラトンのイデア論が悪しき形而上学」だとする立場から講義していないつもりですが、「プラトンのイデア論が悪しき形而上学」だと、誰が主張しているのか、その根拠と、それにつ
885 いての君自身の考えを教えてください。

Q.3 知性的思惟など、プラトンは頭の中で中で（ママ、「中で」は1回でよい）、考える系が多い気がします。

890 A.3 頭で考えなくてどうしますか？肉体派のニーチェがお好みですか？君は「哲学」はもちろん、哲学・思想文化コースには向いていないようですし、そもそも、学問をするには、少しは頭を使わないとやっていけないはずですから、大学をためた方がよいのではないですか？

895 Q.4 「第三の人間」論はよく理解できなかった。しかし、プラトンのイデア論をきっかけにして起こる議論は、いかにして本質を見抜くか、また手に入れるのか、そもそも本質はあるのか、というように、本質というものに注目されているような気がした。

900 A.4 おっしゃることは、ある意味でそのとおりですが、ヘーゲルが『論理学』等で Wesen (本質) というときの、「本質」の意味と、プラトンやアリストテレスにとっての ti esti; (何であるか) としての「本質」の意味の違いを考えてみる必要があると思います。

Q.5 線分の比喻で、悟性、理性でしかとらえられないものもあると知って、上手い例えだな、と思った。カントもこの例えに着目したのではないかと感じた。

905 A.5 そうかもしれませんね。プラトンの『国家』は、当時も今も、哲学をやるうとする人にとっては必読書ですから。もっとも、カントは、『純粹理性批判』の緒言で、

910 Ebensoverliess Plato die Sinnenwelt, weil sie dem Verstande so enge Schranken setzt, und wagte sich jenseit derselben auf den Flügeln der Ideen in den leeren Raum des reinen Verstandes. [I. Kant, Kritik der reinen Vernunft, Einleitung, B9]

それと同じくプラトンは感性界が同じような「窮屈な束縛を」悟性に与えるゆえに、

理念の翼に身を託して感性界を去り、その彼岸へ、純粹悟性の真空中へ飛び入ることをあえてした。（天野貞佑訳）

915 と言っていますが、続けて、次のように批判もしています。どういう意味か考えてみて下さい。

920 Er bemerkte nicht, dass er durch seine Bemuehungen keinen Weg gewoene, denn er hatte keinen Widerhalt gleichsam zur Unterlage, worauf er sich steifen und woran er seine Kraefte anwenden konnte, um den Verstand von der Stelle zu bringen. [Ebenda]

かれはこの努力によっておそろくなんらの進展をもなさぬことに想っていたらなかった、なんとすれば、かれは悟性を動かすためにそれを基礎としたそこに力を向ける支点ともいべき抵抗をもたなかったから。（同上）

925 Q.6 対話篇を少し読みはじめたところですが、予想していたよりも読み易く驚きました。それは今日いくつかあったような比喩などもおりまぜながら書かれているからなのだと想います。きちんと問題意識を持って読むことが大事だと思いました。

A.6 何を読んでいるのか、レポートを楽しみにしています。

930 Q.7 「大」のアイデアについての話が分かりませんでした。パルメニデスが若きソクラテスに反論を加えることで、プラトンは自身の話の説得力を強めていると感じました。

935 A.7 後半は、なるほどそうでしょう。前半は、プリントを見てもう一度自分でよく考えてみて下さい。プラトンが前提している考え方の枠組みと、君が自分では気づいていないけれども、前提している考え方の枠組みに何か違うところがあるのでしょうか。

940

945

950

955